



大正・昭和の鳥瞰図誌

連載—第①回

吉田初三郎の世界



土佐電氣沿線御案内

土佐電氣沿線名所大図繪

文・藤本一美

text by Kazumi FUJIMOTO

「とでん」の名で親しまれている土佐電氣鐵道は、明治三十六年七月に創立。翌年五月二日には、高知市内の堀詰―乗出（現・グランド通）と梅の辻―棧橋（現・棧橋五丁目）を開業。四国では初の軌道であり、全国でも十番目の路面電車であった。

明治三十九年には電燈会社を合併して電燈供給營業を継承。以降、路線を東西方向に急ピッチで延伸し、四十一年には西は伊野まで、四十四年には東は後免まで開通させている。

やがて大正十一年、土佐水力電氣と合併して土佐電氣と改称。軌道線を整えていったが、戦時下の国策で交通事業者の統合が進められると、軌道事業のみを分離して、土佐バス、高知鉄道と統合し、土佐交通に改称している。土佐電氣鐵道の名が復活したのは戦後の昭和二十三年六月のことだ。

藤本一美

首都大学東京非常勤講師。日本国際地図学会会員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に「旅と風景と地図の科学Ⅱ」（私家版2006年）、最新刊に「展望の山50選 関東編」（東京新聞出版局）がある。



『土佐電気沿線御案内 [土佐電気沿線名所大図絵]』

(昭和6 (1931) 年初冬)
土佐電気株式会社 発行
犬山町日本ライン 蘇江の観光社 印刷



「ノルウェー電車」

〘四国初〙の長い歴史。
変わることなく高知の街中を走る。

高知を代表する繁華街のはりまや橋交差点で十字を描き、高知の街中を東西南北に走る路面電車。四国初の軌道として誕生し、現在走っている路面電車では日本一古い歴史を誇っている。23.5kmの路線も、路面電車としては日本一の長さ。昭和20～30年代に製造された車両が今も活躍し、平成14年には超低床車両ハートラムの運転を開始している。今秋から、ノルウェーやポルトガルなどの外国電車の運転を再開する予定。

土佐電気鉄道株式会社 路線図



土佐電気鉄道株式会社

Tosa Electric Railway Co., Ltd.

創立：明治36年7月8日
設立：大正11年8月1日
本社：高知市棧橋通4丁目12番7号



さて、本図はその変転した鉄道史の中で昭和六年に再版された土佐電気時代の作品である。

初三郎自身の再版の喜びを「絵に添へて一筆」に拾ってみると「史と風光の国、土佐遊覧のキーを握るのは即ち土佐電気の路線であり、茲に本図再版の功成り」と言及している。「この電車なくして高知なし」と言わしめるほどに大きな役割を果たしていることは言うまでもない。

それは、土佐電鉄路線を描いた他の初三郎作品、「高知市案内」(昭和五年)、「高知市」(昭和十二年)においても、たくさんさんの全電停名の記載で証明できそう。

全体の構図は、中央に高知市の象徴としての高知城跡公園の丘を配置。古は大高阪山と呼ばれ、地元の偉人・板垣退助、山内一豊他の銅像までも出現し、城下には土佐電気本ビルが目立つ。この近くから東西南北に十字型の赤い路線が延伸している、国鉄(現JR)路線は控えめだ。

さらに浦戸湾と五台山を、城山と対置させ、その湾口には桂浜や龍王岬、坂本龍馬銅像を描出して楽しい。沿線には紀貫之の跡や岩崎弥太郎出生地もあり、背後の剣山や石鎚山、面河溪、室戸岬などの名所旧跡に巧みな筆致で誘ってくれる。